

新たな外国語とのであい

理事 水口 景子

実家のお隣さん、アンリ・ポール・デグチ家は、ドイツ人のおばあちゃん、フランス人のお父さん、ベトナムにルーツをもつお母さん、インターナショナルスクールに通うココ、モニク、アンナの3兄弟の6人家族。初めて家に招かれたとき、玄関で靴をぬがずに家の中に入ったり、お風呂とトイレが一緒になっているのにすごく驚いたことを今でもよく覚えています。

最初は居心地の悪さを感じたものの、それを超えるワクワクがたくさんありました。おばあちゃんが焼いてくれたケーキは、お店で売っているものとはまったく違うものでした。大きなクリスマスツリーの下に用意されていたプレゼントの箱には、当時日本では手に入らないバービー人形の洋服が入っていました。小学校から中学校に通う私に、毎朝お父さんがかけてくれたことば「Bonjour!」は、私が初めてであったフランス語でした。

私が進学した高等学校には、二年次でフランス語とドイツ語が選択科目として設置されていました。1学年400人以上の生徒が在籍していましたが、7,8時間目に設定されている自由選択科目を受講するのは、30人にも満たなかったでしょうか。もちろん、私は迷うことなくフランス語を選択しました。毎週2コマと学習時間は決して多くありませんでしたが、フランス語への憧れが強くなり、大学でもフランス語を専攻することにつながりました。

当時は、他の高等学校でも同じように複数の外国語を学ぶことができると思っていたのですが、現在の職場で働くようになってから、英語以外の外国語が設置されている学校は、少数派だと知りました。また、ドイツ語やフランス語よりも多くの学校が、中国語や韓国語のクラスを設置していることも、実は驚きでした。

財団の仕事に携わってから早20年。日本にとって隣国、隣人のことばである中国語と韓国語を「隣語(りんご)」と位置づけ、二つのことばの教育に関する事業に取り組んできました。ここ数年そのネットワークが二つのことばから多様なことばへと広がり、「隣語」は、隣の人とつながるためのことば＝自分にとって大切な外国語に広がりました。

JACTFLは、中学生や高校生など若い世代が、自分にとって大切な外国語とである環境づくりを目標の一つに掲げている組織です。設立から1年あまり、教えている、

あるいは学んでいる言語は違っても、外国語教育のもつ可能性を信じている人たちが続々と集まってきています。

JACTFL がめざしていることを実現するためには、乗り越えるべき多くの課題があることは明らかではありますが、会員のみなさんそれぞれが持つパッションを力に変えられるような事業をこれからもみなさんとともに進めていくことができたらと思っています。

(公益財団法人国際文化フォーラム)